

## 内蔵：増田の隠れた蔵

増田市の伝統的建造物群保存地区にある細長い家々には、かつての商人の繁栄を偲ばせるものがある。それは「内蔵」と呼ばれる珍しいものだ。多くの町屋では、店舗や住居とは別に1つ以上の蔵があるのが一般的であったが、増田の一部の商家では、蔵をそのまま居住空間に組み込んでいる。内部の土蔵は母屋と大屋根（鞘）でつながっており、屋根のある室内空間となっている。土蔵は貯蔵庫としてではなく、日常的な生活空間として機能しており、豪華な装飾が施されている。現代で言えば、ガレージを改造した書斎やホームオフィスにしたようなものである。

## 増田の特徴的な建築物の発展

19世紀から20世紀にかけて増田の経済が発展していく中で、商人たちは店舗や家屋を大型化した。江戸時代からの細長い短冊形の敷地を踏襲していたため、商人たちは既存の住宅を長くして、直線的な長い建物を並べるようにつくった。また、雪が降って店先を塞ぐのを防ぐために、入口と垂直に切妻屋根を採用したことも、この町の建築的な特徴となっている。また、玄関から裏口までをつなぐ長い土間（トオリドマ）は、店先と住居、内蔵を行き来できるようになっている。屋根があることで風雨を防ぐことができるため、「内倉」を生活空間の延長線上に置くことができ、それに合わせて家具を配置することができた。

## 内蔵の展開

内蔵の扉や造作は黒漆喰で覆われていて、それを磨き上げ、外壁には装飾的な格子を付けた家も見られた。1800年代半ば以降の内蔵は、座敷蔵と呼ばれる2階建てのものが多い。入口付近はフローリング、室内は畳が敷かれ、家族の居住空間として機能している。2階部分は、家族の思い出の品や重要な書類、什器類を保管するために使われている。一般的には、床は無地の板張りで、内蔵の太い天井の梁はむき出しになっている。

増田で最も古い内蔵は1847年に建てられたもので、最も新しい内蔵は1935年に完成したものである。内蔵は外から見えないため、当時の住民は誰が内蔵を持っているのか、持っていないのか必ずしもわからなかったという。90年の間に50棟あまりの内蔵が作られたと言われているが、増田にあった内蔵の数は現在でも不明である。現存する内蔵のうち一部は一般公開されており、一部はレストランや観光情報センターなどの現代的なビジネスに取り組みされている。増田の伝建地区はコンパクトにまとまっているため、半日あれば多くの内蔵を見学することができる。それぞれの内蔵には、その家の個性が表れており、それを、住んでいる家主から案内を受けて見学するのが増田のスタイルである。